

## ディケンズ作品の一わき役は

あなど  
侮りがたい魅力を持つ

一八二二年二月七日、イギリスの小説家チャールズ・ディケンズが生まれた。『オリヴァー・トウイスト』『二都物語』『クリスマス・キャロル』などの作品が今なお広く読まれている。ユーモアをまじえながら社会の不正を糾弾し、人間への信頼を決して失わない作風は多くの人々の魂に慰めを与えている。

そのなかで一作といわれれば迷うことなく『デイヴィッド・コパフィールド』をあげる。自伝的要素が含まれた長編で、その率直な性格によって多くの知己を得て、彼らの助力により運命を切り開き、人生の幸福を勝ち取る物語だが、読む人に勇気を与えてくれる作品といえる。

主人公は当然、魅力的に描かれているが、それにもまして周囲を固めるわき役陣が面白い。何しろ登場人物が多いので、様々な場面で特色のある人々が出てくる。そのなかでもデイヴィッドの下宿屋の主人、ミコーバー氏が気になる。

流暢な弁舌、手紙のたくみさを持ちながら失敗ばかり。何度失敗しても、いつか成功する

に違いないという、救いようのない楽天主義を英語でミコーバリズムと言うのも彼から出ている。この男が物語のなかで、何ともいえない味わいを出しているのだ。

ディケンズの作品には食事や料理の場面がふんだんに出てくるが、このミコーバー氏もなかなかのグルメで、作品のなかでこう描かれている。

彼はおいしい物を食べるためなら、何でも質に入れる用意があつた。彼は焼き網で、からしを表面に塗った焼き肉を作ることにおいては、ひとかどの人物だった。「言わせてもらおうなら、からしを塗った焼き肉よりうまいものは、ちよつと見たららないだろうな」と言いながら、肉を切り分けるのだった。

こんな人物が登場するディケンズの小説は侮れない。

